

〔国際学術交流プログラム／中国語学・教育 講演会記録〕

## 中国語文法研究の将来<sup>1)</sup>

On the Future Chinese Grammar Research

陸 儉 明

LU Jianming

北京大学漢語言語学研究センター/ 中文系

*Peking University*

*E-mail: lujm@pku.edu.cn*

### I. 文法分析と文法研究の目的

文法研究の将来を知るためには、まず文法分析と文法研究の目的をおおまかにでも知ることが先決です。

文法分析と文法研究の目的には、私は主に次の三つがあると考えています。

一つ目の目的は、様々な文法現象に対して、できるだけ合理的な説明をすることです。これには一定の分析方法によって、言語の中の様々な多義現象を実証し、分類し、説明することを含みます。

例えば、服のことをいう場合、“脏的衣服（汚い服）”とも言えるし、また“脏衣服（汚い服）”とも言えるのに、テーブルのことをいう場合、“脏的桌子（汚いテーブル）”と言えるだけで、“\*脏桌子”とは言えません<sup>2)</sup>。これはなぜでしょう。また、どうして、“大红灯笼（大きくて赤い灯籠）”、“小红灯笼（小さくて赤い灯籠）”と言えるだけで、“红大

1) 中国語タイトルは《汉语语法研究的走向》

2) \*は非文を指す。

灯笼”，“红小灯笼”と言わないのでしょうか。また例えば，“盛碗里三条鱼（お碗の中に3匹の魚をよそう）”の中の数量詞の“三条（三匹）”を取ってしまい，“\*盛碗里鱼”となったとたん言えなくて，“把鱼盛碗里（魚を碗の中に入れる）”あるいは“鱼盛碗里（魚は碗の中によそってある）”と言わなければなりません。これはなぜなのでしょう。そしてまた，“把那支笔递给我（あのペンを私に手渡して）”と言えて，“\*把一支笔递给我（一本のペンを私に手渡して）”とは言えません。なのに，“我要他把橡皮递给我，他却把一支笔递给我了（私が彼に消しゴムを渡すよう言ったのに、彼は1本のペンを私に渡した）”は言えるのです。どうしてなのでしょう。“虚心点儿！（謙虚にしたら）”，“大方点儿！（気前よく）”が言えて，“\*骄傲点儿！（傲慢にやりなさい）”や“\*小气点儿（けちなさい）”とは言えません。でも、一方で“马虎点儿！（いい加減にやったら）”，“糊涂点儿（おバカでいこう）”と言うことはできます。これもどうしてなのでしょう。さらに例えば、昨日大阪で大学院生とこんな面白い話をしました。

那孩子的脸气得鼓鼓的            \*气得那孩子的脸鼓鼓的

（あの子の顔はぶんぶんに怒っている。）

那孩子的眼睛瞪得大大的            \*瞪得那孩子的眼睛大大的

（あの子の目はおおきくぱっちり見開いている）

いずれも、前者は言えるのに、後者は言えません。これはどうしてなのでしょう。

また、昨日ある大学院生が次のような質問をしました。中国語の中の“还”は動詞でもあり、また副詞でもあるのですが、動詞として読むと huán となって、意味は比較的単純であるのに、副詞として読むと hái になって、さまざまな意味を表します。それは、時間だったり、頻度だったり、程度だったり、また繰り返しを表したりします。そして、“还”と“是”が結びついて、“还是（それとも）”になると接続詞としても用いられます。これらの異なる用法の“还”の中心的意味は同じなのでしょう、それとも違うのでしょうか。もし同じなら、こんなにたくさんの“还”がどうやって、動詞の“还”から徐々に文法化していった、今日のようなようになったのでしょうか。

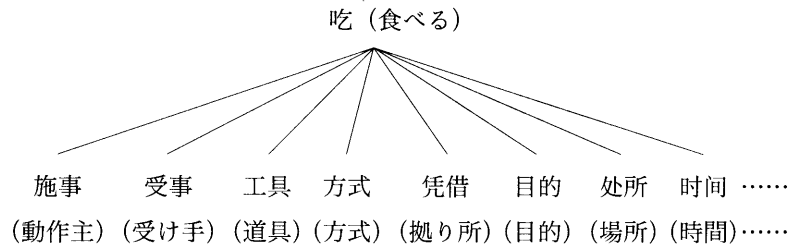
このような質問に対して、私たちはできるだけ合理的な説明ができることを求められているのです。

言語の中には、様々な多義現象があります。私たちがあつ文、あるいはある構文の構造に多義が生じていると感じる場合、例えば、“不适当教育孩子对孩子成长不利（不適切に子供を教育することは子供の成長に良くない／適切に子供を教育しないと子供の成長に良くない）”，“我们急需进口钢材（私たちは輸入鋼材が緊急に必要である／私たちは緊急に鋼材の輸入を必要とする）”，“反对的是他（（だれかに）反対しているのは彼だ／（だれかが）反対しているのは彼だ）”，“对美国的政策（アメリカに対する政策／アメリカの政策に対して）”，“围墙垒高了（塀は積んで高くなった／塀は高く積みすぎた）”等です。私

たちはこれらの文いずれにも多義が生じていることに気づきます。では、私たちはどのようにしてそれを実証していくのか。どのようにすれば、このような形式の上に現れた多義性、あるいは形式の上に反映した多義性を見つけることができるのでしょうか。また、どのようにこのような多義のパターンを分類し、説明をしたらいいのでしょうか。

二つ目の目的は、人類の言語の普遍性を探求することです。ここには、形式言語学が探求する人類言語のシンタクス運算システム上でのシンタクス操作の普遍性と、機能言語学が探求する人類言語の異なるタイプの含意普遍性 (implicational universal)、そして、認知言語学が探求する、人が客観的な世界に対する認知から言葉を通してこの認知を表現できるというこのプロセスの普遍性が含まれます。人類言語の普遍性を探求する以外に、ある種の言語が他の言語と異なる、差異のパラメーターを探し出すのです。そして、上述の両面の探求を通じて、さらに人類の言語に対する認識を深めるのです。

例えば、“吃(食べる)”という動詞をもたない言語はないでしょう。そして、それぞれの言語は共通の“吃(食べる)”という動詞の序列のないの格範疇の構造を持っています。



しかも、各言語において、“吃(食べる)”はいずれも二価動詞として、項(論元)構造を形成しています。しかし、各言語の項構造が完全に同じだとは限りません。つまり、中国語は“動作主-動作-受け手”(张三吃苹果(張三がリンゴを食べる))がある以外、さらに“動作主-動作-道具”(张三吃大碗(張三がどんぶりで食べる))や“動作主-動作-方式”(张三吃食堂(張三が食堂で食べる))、“動作主-動作-抛り所”(张三吃利息(張三が利息で食べる))、“動作主-動作-目的”(张三到北京饭店吃饭, 那是吃环境。(張三が北京飯店へ食事をしに行くのは、その場のムードを選んでいるのだ))など、このように主題( $\theta$ )構造を持つことができます。しかし、他の言語ではそれがあるとは限りません。たとえ“動作主-動作-受け手”だとしても、各言語にはさらに相違があるかもしれません。日本語、韓国語、ドイツ語はいずれも“動作主-受け手-動作”の語順ですし、また聞くところによれば、“受け手-動作-動作主”という言語もあるようです。

また例えば、中国語と英語はいずれも同伴者が関与することを表す介詞あるいは前置詞をもっています。中国語は、“和/跟/同/与”で、英語は with です。これは普遍性であると言えますが、中国語の“和/跟/同/与”と英語の with は、発展の状況が異なります。

それは、中国語の“和/跟/同/与”が介詞として用いられる場合、同伴者が関与することを表すだけで、その他の働きはありません。しかし、“和/跟/同/与”は接続詞でもあって並列関係を表します。英語の with はというと、並列を表す接続詞の用法はありませんが、英語の with は前置詞として、同伴者の関与を表す以外に、道具、方式などを表すことも可能です。例えば、

(1) I cut the potatoes with a knife. (私はジャガイモをナイフで切った。)

(2) She greeted us with smiles. (彼女は笑顔で私たちに挨拶した。)

両者にはどうしてこのような相違がでてくるのでしょうか。この相違は何を物語っているのでしょうか。

研究の三つ目の目的は、実用に役立てるということです。科学研究の最終目的は実用に役立てるためであり、言語研究の場合も例外ではありません。文法分析と研究の目的の一つは、人々の言語の運用に役立てるためであり、またその言語の運用状況に対してどの側面からであれ、道理にかなう説明を加え、人々にそうであることを知らせるだけでなく、どうしてそうなのかも知らせるのです。

## II. たえず新しい言語事実を発掘する

中国語文法について言えば、これまですでに多くの先行研究の成果があり、これらが今後の研究のための基礎を打ち立てています。しかし、中国語に対する私たちの理解と認識はとても少ない。つまり、すでに多くの学者が言及しているように、現在私たちが知っている中国語は、おそらく氷山の一角にすぎないので、これまでの研究成果は言語理論の構築を推し進めるためであれ、実用に役立てるためであれ、いずれの場合であっても、まだまだ必要を満たすことができずにいます。さらに注意に値する点は、現在までのところ、国際言語学の論壇で、私たちの声はまだメジャーなものになっていません。私たちはまだ本当に国際言語学の主流の中に溶けいていませんし、言語学の理論に対しても大きな影響を与えていません。中国の言語学を世界レベルにもっていくため、私たちの中国語研究は、現段階を乗り越え、突破し、発展しつづけなければなりませんし、私たちの中国語文法分析研究も現状を乗り越え、発展しつづけなければなりません。

中国語研究、言い換えれば中国語文法分析と研究が現段階を突破し、発展しつづけるためには、多方面の支えが必要です。その中で最も重要なことは、絶えず新しい言語事実を発掘しつづけることです。

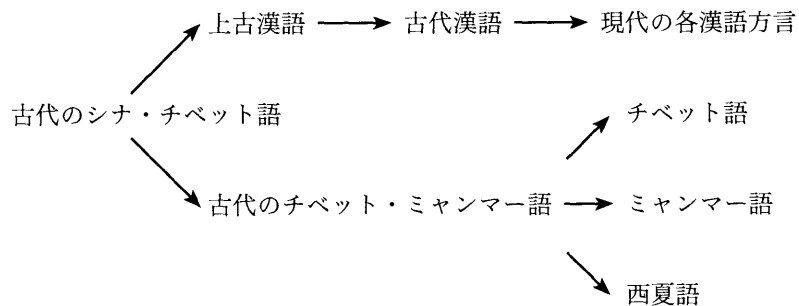
新しい言語事実の発掘は、中国語文法研究の現状突破と発展にとって、根本的な意味を持っています。中国語文法分析と研究が現状を突破し、発展するためには、必ず中国語の言語事実の発掘を重視しなければなりません。ここで指摘しなければならないのは、言語

事実に対する記述は私たちの言語研究の永遠の課題であり、記述はなんといっても最優先のものであると言えます。

ここで、まず上古音研究の例を一つ挙げて、事実の重要性について説明したいと思えます。先に申し上げておきますが、私は上古音が専門ではありませんので、上古音については全く門外漢です。ここではだいたいのところをお話します。

昨年の後半、台湾中央研究院の龔焯城教授を北京大学の中国語言語研究センター（漢語言語研究中心）に招き、中国語の上古音に関する講演をしていただきました。講義ともいえますか。一週間に二回で、一回は2時間でした。龔焯城教授は国内外で有名な言語学者で、西夏語の研究、中国語の音韻研究、シナ・チベット語の比較研究と歴史比較言語研究において、際立った功績をあげています。とりわけ教授の西夏語研究は、国内外において抜きん出ているといっても過言ではなく、人々に注目されています。また、教授のシナ・チベット語の比較研究の業績が卓越していることは、世界的に認められています。ご存知だと思いますが、中国語の上古音については、スウェーデンの漢学者高本漢（カールグレン）が再構成音を出して以来、国内外の専門家の中国語上古音に対する再構成音は諸説紛々としていますが、誰もが相手を満足させることができませんでした。今回、龔焯城教授に講義に来ていただき、私もそのほとんどを聞きました。私もすべてちゃんと理解できたというわけではありませんが、興味深く聞かせていただきましたし、特に方法論についてはとても啓発を受けました。龔教授の講義内容は大体以下のとおりです（私が龔教授の講演内容に対する理解に基づいてまとめたもので、間違いがあれば私の責任です）。

中国語の上古音の再構成は、人によってとても大きな相違があります。例えば、上古漢語にいくつ母音があるか。それぞれの母音の音価はどうであるか、上古漢語には複子音があるかなどについて、いずれも異なる意見があります。だれもが依拠する資料の大部分は中国語資料で、例えば詩経の押韻、古代の韻書、形声文字、反切、読若（～のように読む）、現代の方言などです。もし私たちが、引き続きこれらの資料に依拠して、古代音の再構成を議論するならば、ある程度の進展はあるでしょう。しかし、現状を突破するという事は難しいし、より多くの共通認識も得にくいでしょう。今ここで、角度を変えて、シナ・チベット語言語資料を利用して観察、分析を行ってみてはどうでしょう。まず、よく知ることです。マクロ的な観点からみれば、シナ・チベット語の歴史的発展は大体次の通りです。



そこで、龔教授は大量のチベット語、ミャンマー語、西夏語およびシナ・チベット語族の言語資料から上古漢語の子音・母音の再構成を行ったのです。具体的には、母音がいくつあったのか、実際の音価はどうなのか、複子音はあったかどうかなどの問題について、多くの建設的な再構成音に関する見解を示したのです。

龔教授は、新しい資料、新しい方法で新しい結論を得ました。龔教授の新しい再構成音がどうかについては、みんなで議論することもできますし、異なった意見を持ってまかまいません。しかし、ここで私が指摘したいことは、龔教授の見解は勝手気ままに出されたものではないということです。ですから、漠然と「私は賛成できません」と言うのはよくありません。もし、龔教授の意見を否定したいなら、必ず(一)事実をもって、あるいは理論的に、シナ・チベット語族というものがそもそも存在しないこと、中国語とチベット語、ミャンマー語、西夏語などは1つの語族ではないことを論証しなければなりません。または、(二)事実をもって、龔教授の挙げるチベット語、ミャンマー語、西夏語などの言語の例で、中国語と対応する語が同じ語源でないことを証明しなければなりません。あるいは、(三)事実をもって、龔教授の挙げたチベット語、ミャンマー語、西夏語などの言語の例の、その音声標記が正確でないことを証明しなければなりません。

また、ここで文法研究についての小さな例を挙げてみましょう。“像木头似的(木のようだ)”のような比較を表す構造を簡略化して、“像X似的”としましょう。この構造の階層分析は、いったいAでしょうかそれともBでしょうか。

A. 像//木头似的

B. 像木头//似的

これについて中国語言語学界でとても議論になりました。私はかつて“像X似的”と平行する現象を示し、また比較の意味を表す“跟X一样”という構造が存在することを根拠に、“像木头似的”はA“像//木头似的”と切るべきだと考えました。しかし、その後、ある学者が下のような言語事実を発見しました。

像个猪似的(ブタのようだ)

この学者はこの例で“像木头似的”に対する切り方は、Bを採用すべきであり、Aを採用すべきではないということを証明しました。

どうしてこの例がこんなに大きな役割を果たし、Aの分析法を否定できるのでしょうか。なぜなら、私たちは、通常どの文法書にも“数+量+名”構造が目的語となった場合、もしその数詞が“一”なら、“一”は省略して言わなくてもいいという規則が書かれていることを知っています。“像个猪似的”は間違いなく“像一个猪似的”の省略形です。この規則に基づけば、“像个猪似的”の構造で動詞“像”の目的語を担っているのは、“(一)个猪”でしかなく、“(一)个猪似的”ではありえません。“(一)个猪”だけが“像”の目的語になるので、“一”を省略して言わなくていいのです。しかし、その後間もなく私たちは、また新聞や雑誌で以下のような言語事実を発見しました。

- (1) 他例行公事似的**查了位旅客的证件**，突然发现那证件上的照片跟通缉令上的照片是那样的相像，不由得抬头注视着那位旅客。(新聞) (彼は例のごとく、旅客の身分証明書を調べると、その身分証明書の写真と指名手配の写真が似ていることに突然気づき、思わず顔を上げてその旅客の顔を見つめた。)
- (2) 今天不知怎的，心里慌慌的，做什么事都定不下心来，刚拿起新来的《文艺报》，**看了篇书评的开头**，就又放下了，……。 (雑誌) (今日はどうしたわけか、心がそわそわして、何をするにも落ち着かない。来たばかりの《文艺報》を手にとって、書評の始めを読んだかと思うと、また下に置いたりした…。)

例(1)の“一位旅客(1人の旅客)”は動詞“查(調べる)”の目的語ではありません。それは“查(調べる)”の目的語の中心語(被修飾語)である“证件(身分証明書)”の連体修飾成分です。同様に、例(2)の“一篇评论(1篇の評論)”も“看(見る)”の目的語ではなく、これは“看(見る)”の目的語の中心語である“开头(始め)”の連体修飾成分にしすぎません。しかし、“一位旅客(1人の旅客)”と“一篇评论(1篇の評論)”の数“一”も省かれています。この言語事実は以下のことを説明しています。数詞が“一”の“数詞+量詞+名詞”構造は、目的語の位置にある時にのみ、“一”が省略できるというわけではなく、“一”の“数詞+量詞+名詞”が一つの構造の始めにあり、その構造が目的語の位置にある時も、“一”は省略することができるというわけです。次の例はさらにこの点を説明しています。

- (3) 忽然，她看见**只松鼠在松树上偷偷地望着她**。(書籍)  
(忽然，她看见一只松鼠在松树上偷偷地望着她。)  
(突然，彼女は1匹のリスが松の木の上でこっそり彼女を眺めているのが見えた。)
- (4) 突然，他发现**个孩子**在铁道上坐着****，……。 (新聞)  
(突然，他发现一个孩子在铁道上坐着，……。)  
(突然，彼は1人の子供が鉄道の線路の上に坐っているのを発見した，…。)

上の言語事実は先の“像个猪似的”に対しAの分析方法を採った見方を翻すには十分でないことを物語っているだけでなく、これまで一般に支持されている、数詞が“一”の“数詞+量詞+名詞”構造が目的語の位置にあつてこそ、“一”が省略できるという結論を修正するのを助けているのです。

アメリカの雑誌《Language》も、1900年代末に、新しい言語事実の発掘と発見を重視すべきであることを強調しました。当雑誌は1996年第3期に編集部が“言語記述レポート”を求めるといふ原稿募集の短文を発表しました。その文章の一部は価値があるのでここに引用します。

言語と言語の用法に対して記述を行うことは、記述言語学の一つの主要な任務である。人の言語能力、情報コミュニケーション能力、言語史のさらに高いレベルでの概括について言えば、どれも言語記述（描写）に依存しないものはない。理論研究についていえば、言語記述報告も重要な役割を果たしてきた。Gumperz & Wilson (1971)のインドのKupwar村の言語併合現象に対する記述と研究は、人々の言語借用と族統が互いに関係がないという観点に対して、再考を促した。Derbyshire (1977)の、文が目的語から始まるというある言語に対する記述は、類型学に、自明の普遍的現象に対する説明を書き直さざるを得なくするであろう。Hale (1973)が、オーストラリアのある言語の音声の典型的な形式に対して行った報告は、音韻学の学習有用性の問題について再考を促した。Stewart (1983)の、アフリカ諸言語の母音調和のシステムに関する研究は、それによって母音調和の現象を説明しているいくつかの特徴に再考を迫った。要するに、言語記述（描写）レポートは、現行の理論研究に貢献できるということである。

これは言語記述の重要性を説明しており、同時にアメリカの言語学界が1990年代に再び言語事実に対する記述を重視し始めたことを説明しています。私と郭銳が《世界汉语教学》1998年第4期に発表した、《汉语语法研究所面临的挑战（漢語語法研究が直面している挑戦）》の文章の中でも非常にこの点を強調し、さらに言語事実に対する記述は言語研究の永遠の研究課題だと考えました。最近、チョムスキー（N. Chomsky）が、2004年の*The generative enterprise revisited*という文章の中で、21世紀の言語学の動向を展望した時にこう指摘しているのを読みました。言語学の発展は“記述性の特徴”を呈し、理論説明の面では、“著しい進歩はないかも知れない”と。また、説明の十分さ（beyond explanatory adequacy）を乗り越えるには、まず記述の仕事をきっちり行うことがベストだと。

記述が最優先だと強調することは、少しも行き過ぎではありません。言語事実をはっきり記述しないで、何を説明すると言うのでしょうか。



### III. たえず理論と方法を更新し、多元論の道を歩む

周知のとおり20世紀の前半は、アメリカ構造主義言語学が一世を風靡していたと言えます。50年代には「チョムスキー革命」が勃発し、一時チョムスキーの生成文法が世界中を席卷しました。しかし間もなく、60年代末から、とりわけ80年代には、機能学派、認知学派が次々と起こり、チョムスキーを代表とする形式派に対抗しました。言語学界に多元化の態勢が出現したのです。この大きな背景の下で、現代中国語文法研究は1950年代、とりわけ70年代末あたりから、使用される研究分析理論と方法も絶えず大量に現れました。たとえば、以下のようにです。

伝統的な文成分分析理論（つまり中心語分析法）、50年代に採用され始めた構造主義の分布分析理論や展開理論と階層分析理論、60年代以降以下のものが相次いで採用された。変換分析理論、意味特徴分析理論、「格」文法分析理論、意味指向分析理論、深層構造を表層構造に転換する転換生成分析理論、結合価分析理論、システム機能分析理論、機能段落分析理論、認知分析理論、類型学分析理論、「中心語」分析理論、軽動詞理論とVP空範疇理論（verb shells）分析理論、構式文法理論等々。

中国語文法研究の歴史が示しているように、（中国語は）言語現象がきわめて複雑なため、ある種の理論や方法の出現とその運用によって、既存の理論と方法では解決することができなかつたいくつかの問題を解決することができ、既存の理論と方法では説明することができなかつたいくつかの現象を説明することができました。しかし、それもいくつかの問題を解決し、いくつかの現象を説明しただけで、すべての問題を解決したり、すべての現象を説明することはありえません。これがそれぞれの理論や方法の限界なのです。限界はイコール欠点ではありません。限界というのは、ある理論や方法では一定の範囲内の問題を解決し、一定の範囲内の現象を説明できるだけだということです。既存の分析理論と方法の限界は、新しい分析理論の誕生と運用を促しています。言語事実は私たちに教えています。中国語研究、中国語文法研究が現状を突破し、発展しようとするなら、必ず絶えず分析研究の理論と方法を探求し、更新し続けなければならないと。ここでもみなさんに馴染みの深い例でもって説明したいと思います。

現代中国語の中の存現文は、みなさんもよくご存知だと思います。つまり、以下のような文です。

- (1) 台上坐着主席团。(壇上に議長団が座っている。)
- 床上躺着病人。(ベッドに患者が横たわっている。)
- 门口站着许多孩子。(入り口に多くの子供が立っている。)

- (2) 墙上挂着两幅画。(壁に2枚の絵がかかっている。)  
 门上贴着对联。(ドアには対聯が張ってある。)  
 袖口上绣着玫瑰花。(袖口にはバラが刺繡してある。)
- (3) 衣服上爬着一个蚂蚁。(服に1匹のアリが這っている。)  
 天上飞着无数的蝗虫。(空に無数のイナゴが飛んでいる。)  
 桥上走着两个孩子。(橋には2人の子供が歩いている。)
- (4) 前面来了一个人。(前から一人の人が来た。)  
 草丛里窜出一只兔子。(草むらから1匹のウサギが飛び出た。)  
 对面开过来一辆吉普车。(向かいから1台のジープが走ってきた。)
- (5) 村里死了一个人。(村で人が一人死んだ。)  
 监狱里跑了个犯人。(刑務所から1人の犯罪者が逃げた。)  
 隔壁飞了只鸽子。(隣の家から一匹のハトが飛びさった。)

例(1)から(3)は存在を表す文です。その中の例(1), (2)は「静態存在文」と呼ばれており、例(3)は「動態存在文」と呼ばれています。また、例(4)は出現を表す文で、例(5)は消失を表す文です。

現代中国語の中の存現文に関して、中国語文法学界ではすでに十分討論されていますし、ずいぶん詳細に記述もされています。概算統計によると、1950年代から現在にいたるまで、現代中国語の存現文に関する論文は40数編に達しています。しかし、だからといって存現文についてすでに検討することは何もないと考えることはできません。事実、今日の認識レベルに立てば、中国語の存現文にはさらに説明を要する多くの問題が依然として存在することを私たちに教えてくれています。その問題というのは以下のようなものです。

1. 言語事実が私たちに教えているのは、同じ述賓構造(動詞+目的語構造)でも、目的語の意味役割が異なれば、表す文法的意味には相違が生じるということです。例えば、
  - (6) a. 吃苹果 リンゴを食べる [目的語が受け手]
  - b. 吃大腕 どんぶりで食べる [目的語が道具]
  - c. 吃食堂 食堂で食べる [目的語が場所。方式という説も]
  - d. 吃环境 環境で食べる [目的語は目的]
 いずれも述賓構造ですが、目的語の意味役割が異なるので、これらの文法的意味もそれぞれ異なります。それでは、どうして存現文の目的語の意味役割は一様でなくてもよいのに(例(1)の中の目的語は動作主、例(2)の中の目的語は受け手)、表わす文法的意味が同じ(いずれも静態の存在を表す)なのでしょう。
2. 項構造理論に基づけば、動詞の動作主は外項(域外論元)に属しており、道理上動詞の前に現れるべきなのに、どうして例(1)と例(3), (4), (5)の中で、動詞の動作主は動詞の後ろに行ってしまったのでしょうか。

3. 例(2)では、動詞の後の名詞が表す事物はすべて動詞の受け手で、動詞の後にあって目的語となっています。しかし、どうして動詞の動作主が現れていないだけでなく、現れてはいけないのでしょうか。
4. 明らかに例(1)から(3)は存在を表し、例(4)は出現を表し、例(5)は消失を表しており、文法的意味はそれぞれ異なるのですが、先人の学者たちはどうしてそれらを1つにし、合わせて“存現文”と呼んだのでしょうか。

この一連の問題は、以前の文法分析の理論ではいずれもうまく説明ができません。あるいは、いずれも人を十分に満足させる説明をすることができませんでした。例えば、2番目の問題に対しある人はこう説明しました。前に場所成分があるので、動詞の動作主を圧迫し、それで、もし一価動詞ならば、動作主は動詞の後ろに移動しなければならないし、もし二価動詞なら、文中に現れることができないと。しかし、そうなると、こんなふうに質問する人がいるに違いありません。

どうして文頭に場所成分があると動詞の動作主を圧迫してしまうのだろう。“我看见一只老鼠（私は1匹のネズミを見たことがある）”の文頭に、場所成分があっても、動詞の動作主は依然として文中に存在することができ、“在书房里我看见一只老鼠（書斎で私は1匹のネズミを見たことがある）”とすることができるのはどうしてなのだろう。

上の説明では人を十分に満足させられないことがわかります。またある人はこう言います。“主席团（議長団）”は本来“坐（座る）”の内項（域内論元）であるはずなので、外項が後ろに移るという問題は存在しないと。“主席团坐着”という言い方については、“主席团”を主題化させるために前に移動させた。このような考え方についても、たまたまこう質問する人がいるでしょう。一価動詞の動作主や主となるシテは内項なのかと。何を根拠にしているのでしょうか。どうして二価動詞と三価動詞の動作主が外項で一価動詞の動作主が内項になるのでしょうか。上の観点に立つ人はいくつかの理由をあげることができるのですが、それでも人を十分に満足させることはできないのです。

1980年代後半に生成文法学派の中心人物であるチョムスキーが、Larson理論の啓発を受けて提起した軽動詞（light verb）理論は、上の問題に対して、わりあいよく答え説明しています。

軽動詞という術語を、最も早く使い出したのは、イエスベルセン（Jespersen）でした。しかし、彼の言う軽動詞は下の構造の中の動詞 *have*, *take*, *give* のことを指しています。

- (7) a. *have* a rest, a read, a cry, a think
- b. *take* a sneak, a drive, a walk, a plunge
- c. *give* a sigh, a shout, a shiver, a pull, a ring

これらの構造は英語の中で標準的な“動詞＋補語（complement）”構造です。しかし、

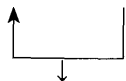
ここでの have, take, give などの動詞はいずれも実際の意味ではなく、どれも比較的虚なものです。“John has a read”と言う場合、Johnが「“a read = 一个读书 (1つの読書)”を“has = 有 (持っている)”ことを指しているわけではなく、ただ“John reads (ジョンが読書する)”を意味するだけです。残りも類推してください。それゆえ、これらの構造の中の動詞 have, take, give を light verb (軽動詞) と呼ぶのです。その後、Grimshaw & Mester (1988) たちも light verb (軽動詞) でもって、日本語の動詞“する”(中国語の“做”に相当し、英語の do にあたる)の“N+V”述賓構造を研究し説明するときに次のことを発見しました。意味から見ると、動詞Vとしての“する”自身は項役割を示す能力は持っておらず、真に指し示す能力を持っているのは、それと組合わさって、その行為あるいは事件を表す抽象名詞であり、ただ、もともとその抽象名詞と関係のある項だけが、文法的に述語動詞“する”の制約を受けるのだと。

チョムスキーは軽動詞という術語を借用しましたが、その指すものは全く異なります。チョムスキーの言う軽動詞は意味的内容があるが、音声形式のない動詞を指しており、これは説明の必要のために出した架空の動詞なのです。このような動詞の特徴は、それが必ず1つの音声形式を持つ、実義をもった動詞につかなければならないという点です。軽動詞の分析理論に基づけば、例(1), (2)は本来、いずれも存在を表す“有”を含む軽動詞Vと考えます。具体的な仮説は以下の通りです。

- (8) 台上 v 主席团坐着 [vの意味は存在を表す“有”に相当する, 以下同じ]  
 床上 v 病人躺着  
 门口 v 许多孩子站着
- (9) 墙上 v 画挂着  
 门上 v 对联贴着  
 头上 v 帽子戴着

軽動詞理論によれば、このように意味的内容があつて、音声形式を持たない軽動詞は必ず何らかの実際の意味を持つ動詞性の語句にくっつかなければいけないのです。例(8), (9)の中の軽動詞vはそこで、後ろの動詞性成分を軽動詞の前にくるように強制し、そこで例(1), (2)が生成されるのです。例(1)の一つ目の“台上坐着主席团”の生成は具体的に表すと以下ようになります。(紙幅の関係上、ツリーを使用せず表します。)

- (10) 台上 v 主席团坐着



- (11) 台上坐着 v 主席团

残りの例文も同様です。この説明はこれまでのよりもよさそうです。“出現”と“消失”を表す文もこのような説明をすることができます。例(4), (5)の一つ目の文を例に分析して

みましょう。

(12) 前边 v 一个人来了



(13) 前边来了 v 一个人

(14) 村里 v 一头猪死了



(15) 村里死了 v 一头猪

残りの例文も同様です。このように、軽動詞分析理論を使えば、例(3)、(4)の存在を表す文をよりよく説明ができるだけでなく、もともとと言われていた存現文全体に対する認識を深めることができました。

しかし、軽動詞理論を用いても二番目と四番目の問題を解決するだけで、一番目と三番目の問題にはやはり答えていません。上で述べた五番目の問題は全く解決していません。そこで、私たちはまた新しい理論と方法を求め、そうしてこの問題を立派に解決しなければならぬのです。

とはいえ、これまで述べたこの道理はだれもが認識しているわけではありません。多くの人はある理論や方法を使うことを習慣としています。ですから、近い将来に、観念を新しく変えることがとても大切なことです。しかも、観念の更新にあたって、最優先の、最も重要なことは、どうやってできるだけ早く新しい理論や方法を提起するかということではなく、一つの学派の理論的観点と方法をあがめ尊んで、運用することに慣れた状態からどうやって抜けだし、多元論を堅持し、積極的に他の学派の理論的観点と方法を知り、そしてその中からうまく、合理的で取るべき価値があるものを吸収し、自分のものとするかです。中国語文法研究の歴史的事実もこの点を物語っています。

#### IV. 特徴の研究を重視する

1970年代から、言語研究について言えば、1つの全般的な傾向は、特徴の研究や記述を徐々に重視してきたことです。言語の応用研究の上でも理論研究の上でも同じで、手段は異なっても結果は同じと言えます。

言語の理論研究の上から見ると、言語学の中で、1番早く特徴を問題にしたのは音素論です。彼らは例えば [m], [e], [n] の音声の特徴をそれぞれ分析して、以下のように表しました。

| [m]   | [e]   | [n]   |
|-------|-------|-------|
| +子音   | -子音   | +子音   |
| +共鳴音  | +共鳴音  | +共鳴音  |
| +持続性  | +持続性  | +持続性  |
| -耳を劈く | -耳を劈く | -耳を劈く |
| +濁音   | +濁音   | +濁音   |
| +鼻音   | -鼻音   | +鼻音   |
| +両唇   | -両唇   | -両唇   |
| -円唇   | -円唇   | -円唇   |
| -舌尖   | -舌尖   | +舌尖   |
|       | -後舌位  |       |
|       | -低舌位  |       |
|       | -高舌位  |       |

音声学は、音素を最小の音系単位としており、音素論は、すでに弁別的特徴に十分注意をはらっていますが、やはり音素を最小の音の単位としています。非線性生成音韻論になると、音声特徴を音の最小単位としています。要するに最も早く特徴を重んじたのが音素論で、続いて意味論です。“意味特徴”(semantic feature)は本来、意味論の中での概念で、ある語、さらにある類の語が意味上持っている独自の意味的要素、あるいは意味上有している特徴のことを指しています。意味論において、語の意味特徴を分析し、記述するには、大体以下の3つの目的があります。

1つ目の目的は、ある特定の角度からある1つの意味類に対して、細かな再分類を行うことです。例えば、生物の中で、人は1つの意味類です。一族の構成員のそれぞれの世代と相互関係を説明するために、私たちはいくつかの意味特徴(“+”は正の特徴を示し、“-”は負の特徴を示す、以下同じ)に基づき、一族の人の呼び名に対して、細かな分類をしています。

- (16) 母親(母) [+直系, -男性, +女性, +目上, -目下, +年長, -幼少]  
 父親(父) [+直系, +男性, -女性, +目上, -目下, +年長, -幼少]  
 哥哥(兄) [+直系, +男性, -女性, -目上, +目下, +年長, -幼少]  
 姐姐(姉) [+直系, -男性, +女性, -目上, +目下, +年長, -幼少]  
 弟弟(弟) [+直系, +男性, -女性, -目上, +目下, -年長, +幼少]  
 妹妹(妹) [+直系, -男性, +女性, -目上, +目下, -年長, +幼少]  
 舅母(叔母) [-直系, -男性, +女性, +目上, -目下, +年長, -幼少]  
 舅父(叔父) [-直系, +男性, -女性, +目上, -目下, +年長, -幼少]

もう一つの目的は、同じ意味類に属する、異なる語句の間の違いをはっきりと示すことです。例えば“火”と“光”は目で見える自然現象という同じ意味類に属しています。しかし、意味の上で明らかに違いがあります。その相互の違いをはっきりと示すため、以下いくつかの面からそれらの意味特徴を記述することができます。

- (17) 火 [+現象, +光度, +温度, -速度, +形体, ……]  
光 [+現象, +光度, +温度, +速度, -形体, ……]

この記述があれば、次の問題について、はっきりと説明しやすくなります。どうして“光的速度(光の速度)”という言い方があって、“\*火的速度”という言い方がないのか。どうして“大火”、“小火”という言い方があって、“\*大光”、“\*小光”の言い方がないのか。また、例えば、動詞の“喝(飲む)”と“吃(食べる)”は、ある角度からみれば、1つの意味類—飲食類に属します。しかし意味上違いがあり、その相互の違いを明らかにするために、以下いくつかの面からその意味特徴を記述することができます。

- (18) 喝 [+動作, +対象が液体, -対象が固体, +要容器, +物体の消失, ……]  
吃 [+動作, -対象が液体, +対象が固体, ±要容器, +物体の消失, ……]

同様に、また上の記述があれば、私たちは以下の問題について、はっきり説明しやすくなります。どうして“喝水(水を飲む)”、“喝汤(スープを飲む)”、“喝啤酒(ビールを飲む)”ということができて、“\*吃水”、“\*吃汤”、“\*吃啤酒”と言わないのか。(一部の方言、例えば吳方言では言うことができる。)また反対に、どうして“吃饭(食事をする)”、“吃梨(ナシを食べる)”、“吃面包(パンを食べる)”と言えて、“\*喝饭”、“\*喝梨”、“\*喝面包”と言えないのか。ここで挙げた例から私たちは、語句に対して意味特徴の記述を行えば、異なる語句のコロケーションなど一連の用法上での差異を説明するのに有用であることが分かります。

3つめの目的は、意味論における「意味特徴」という概念を用いれば、同義に見えるけれど実際は同義でない語を区別することができます。例えば“看(見る)”と“看见(見える)”の意味はたいして違わないようですが、実際は目を使うという点以外、他に共通点がありません。この二つの語の意味特徴に対する分析を通して、この違いがはっきりと分かります。ご覧下さい。

- (19) 看 (見る) [+視覚, -受身的感知, +自主性, +制御, ……]  
看见 (見える) [+視覚, +受身的感知, -自主性, -制御, ……]

文法論の分野で意味特徴を重んじたのは、70年代以降の事です。当時「意味特徴」という概念の術語を文法論の中に借用しました。それは、次の二つの目的からです。一つ目は、同形多義の文型パターンをもたらす原因を説明するためです。もう一つは、ある文型の中で、どうして同じく動詞なのに、あるいは形容詞なのに、またあるいは名詞なのに、

あるものは入れられて、あるものは入れられないのはどうしてかを説明するためです。チョムスキーの生成文法理論にまで発展してくると、特徴はまたそれに新しい意味を付与されました。周知のように、チョムスキーは、構造主義が言語の記述に対してまとめた規則は複雑すぎると考えました。それで彼は、生成文法の観点を提起し、それによって文法の規則を簡略化しようとした。簡約は、生成文法論において、一貫して重要な原則です。1957年の核心文から非核心文への転換、1964年における深層構造から表層構造への転換、1980年代初めのGB理論（統率・束縛理論 Government-Binding Theory）は、「 $\alpha$ 移動」の規則だけが残り、その他はすべて原則になって、そして最も簡単なモデルやここ数年の論述になっては、多くの原則や位置移動の規則はほぼどれも要らなくなりました。D（深層）-構造、S（表層）-構造もなくなり、ただ、「原理とパラメーター」理論と「X-bar」構造モデルだけが残りました。いっそう経済原理を強調した形になったわけです。また、中心語理論と素性照合理論（feature checking）、及び軽動詞理論とVP空範疇理論は、新しい研究課題を注ぎ込みました。それは、インターフェイス（interfaces）の研究です。基本的なシンタクス操作は基礎部分（つまり辞書）から、各種の意味やシンタクスに係わる特徴を帯びた語項を取り出し、それで何度も合併（Merge）を繰り返します。例えば、素性照合（中心語と標示語、中心語と補足語が特徴上一致するか）を通して、ここから生成した語項が組み合わさって音韻とつながり、論理的意味とつながり、それによって最終的に私たちが耳にしたり目にしたりする文が生成されるのです。つまりは、語句の特徴の分析と記述はとても重要な位置に置かれ、“多くの語彙と小さな規則”の道を歩みだしたわけです。

私たちはさらに自然言語処理と理解という分野の言語応用研究を見てみたいと思います。周知のように、自然言語処理と理解は最も早く規則の方法をもって、コンピュータの文に対する理解と生成を実行しようとしたのですが、結局は失敗に終わりました。そこで統計を用いる方法ができました。コーパスを用いてコンピュータ自身に、無数にある文字のコーパスに対する“学習”を通して、コンピュータに文に対しての理解と生成を実行させるわけです、結局これも思わしい結果をえられませんでした。現在は、比較的どこでもPollard & Sagが提唱した中心語駆動フレーズ構造文法を採用しています。中心語駆動フレーズ構造文法の規則はいずれの場合も中心語をめぐって展開しています。しかし、最も基礎的で、どこでも通用している原則は中心語特徴原則で、同時に複雑特徴（complex feature set）と統一（unification）算出方法をもって、コンピュータに、文に対しての理解と生成を実行させるのですが、基本的な道理はチョムスキーの素性照合と同じで、最終的には、「多くの語彙と小さな規則」のいわゆる「語彙主義」（lexicalism）の道を歩み、しかも、語彙主義は現在の言語学理論の発展の最大の傾向だと考えられています。

言語理論研究と応用研究が最終的には同じ道を歩むことになったのは、決して偶然の一



致ではなく、相互に影響しあった結果です。

## V. 仮説を重視する

古い研究方法の主たるものは帰納法です。帰納法の科学性は、もちろん疑いをはさむ余地がありません。なぜならそれは事実に基づいて論じるからです。その問題はというと、第一に簡単に、権威っぽい、容易に変更を許さないような結論を出してしまうこと、第二に、現実に依拠する材料がいくら多くてもきわめて有限のものなので、得られる結論の信用度を疑わずにはいられない点。第三に、事物はたえず発展するものなので、以前の結論がたとえどんなに満足するものであっても、その時の事物に適用しているだけで、変化した違いに適用することができない点です。したがって、帰納法だけに頼ると、研究に一定の限界をもたらしてしまいます。ここ30年来の全体的な科学研究を概観すると、研究方法の基本的な動向は、

限られた資料に基づいて→仮説を立て→新しい資料で検証し→新しい結論を獲得し  
→新しい仮説を立て→更に新しい資料で検証し→……

というサイクルを繰り返して、それによって絶えず科学研究を押し進め、そしてより普遍的な原則により近い研究成果を獲得してきているのです。各専門分野の領域が発展していく事実は私たちに以下のことを教えています。研究はさらなる現状突破を求めており、科学はさらなる発展を求めていると。実際を重んじることは当然必要ですが、仮説を立てることも不可欠です。とりわけ、現在のように仮説をたてるという概念がどこでも薄い状況の下では、より強調しなければならないものでしょう。科学研究の事実は私たちに以下のようにも教えています。理工系の領域内はもちろん、私たちの言語研究の領域内でも、現在と過去を問わず、多くの重要な現状突破はどれも科学的な仮説から離れられません。中国語音韻学の「ゼロ声母（子音）」の仮説、音声学の「音素」仮説、最近の Richard Larson やチョムスキーの「VP 空範疇理論」(verb shells) や「軽動詞理論」(light verb) に関する仮説などは、言語研究を推進する上で、いずれも積極的な働きをしました。そして、特にチョムスキーの三つの基本仮説——一つ目は人の頭脳には生まれつきの言語メカニズムがあること、二つ目に、人類の言語は共通の普遍的な言語規則（「普遍原則」とも言う）を有すること、三つ目にこのような人類言語の普遍的な規則は、高度にまとめられており、とても簡明であったので、この基本仮説は地球的規模において極めて大きく言語研究を押し進めました。そのため、まさにアインシュタインの言うように、「科学の創造性のある仕事の重要な特色は、先に理論を予言するいくつかの論拠があって、しかるのち実験によってそれを確認する。」のです。現代のアインシュタインとたたえられているスティーブン・ウィリアム・ホーキング氏も「科学の最も基本的な態度のひとつは疑問を抱くこと

であり、科学の最も基本的な精神の一つは、批判するということである。」と述べています。我が国の四次元力学研究で有名な科学者の劉岳松教授も「奇跡は、しばしば幽玄境の中から誕生する。世界のどんな偉大な発明も、最初奇観でなかったものはない。」と述べています。

ある意味から言えば、科学研究は“盲人摸象, 自圓其說 (盲人が象をなでるようなもので、勝手に推量してこじつける)”という言い方ができるでしょう。このことには賛成しない人もおそらくいるでしょう。しかし私は、これが科学研究の真実の記述あるいは真実の描写と考えています。実際、中国語文法研究について言えば、既存の結論あるいは見方はどれも一つの仮説あるいは見方としか言えません。また、研究が一步一步深まるにつれ、その中には証明されて定説になるものもありますが、大部分の結論あるいは考えは、修正されたり、あるいは完全に遺棄される場合さえあるのです。そのため私たちは研究していく上で、必ず“継承、借鉴、怀疑、假设、探索、求证 ((先人たちの研究を) 継承し、手本とし、疑問を抱き、仮説を立て、思索を重ね、論証を求める)”ということをごまかでも続けなければなりません。これはつまり、科学研究が現状を突破する上で必ず通らなければならない道であり、中国語文法研究が現状を突破する上で必ず通らなければならない道であると言えます。

## VI. 実用研究の強化

すでに述べたように、文法分析と研究の目的のひとつは、人々が言語を実際に用いる場合の手助けのためと、いろいろな言語運用状況に対し、道理にかなった説明を与え、人々に事実そのものだけでなく、なぜそうなのかを知らせるためであります。目下、中国語の文法分析と研究は主に5つの面に寄与しています。①中国語の規範化、標準化の仕事への寄与、②(中国の) 中小学校の国語教育への寄与、③対外漢語教育への寄与、④中国語情報処理への寄与、⑤辞書編纂作業への寄与です。実用研究に関する問題は、時間の関係上またの機会にし、ここでは詳しく述べないことにします。

訳／中西千香 校閲／荒川清秀

2005年6月19日(日)第35回国際学術交流プログラム・

第1回中国語学・教育 講演会

於 愛知大学車道校舎本館9階 K902教室